

建築家が頼りにする 火の専門家 安井 昇

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco



■京都の町屋育ち

1968年に京都に生まれた安井昇さんの生家は、築100年近い町屋である。今も母親が住むその家でお祖父さんが建具屋だった、その流れで父親がサッシ工事を生業にしていた。日本の伝統建築を肌で感じながら育ったのです。言わずもがな建築を選び、東京理科大学理工学部建築学科から同大学院を1993年に卒業。学生時代はアメフトに打込む時間が欲しくて「できるだけ暇な研究室」を求めて、防火の研究室に所属したとか。思惑は外れて、筑波にある建築研究所に実験のために頻繁に通う忙しい日々を過ごす。その中で、『木造は本当に火事に弱いか』（1988年、井上書院）や『災害は忘れた所にやってくる』（2002年、工学図書）などの著者で、防火の大家である長谷見雄二先生に出会ったのでした。

「住宅の設計がしたい」という想いで積水ハウスに入社。ただ、重量鉄骨3階建住宅などを開発する部門に配属となり、住宅設計にかかわることが少なかった。仕事は楽しかったが、一級建築士も取得していたから、5年目に独立を決意し退社。退職後の数か月は、インドを見て回ったとか。

帰国後、設計事務所の“桜設計集団”を立ち上げる。最初に事務所の場所が世田谷の「桜」だったことと、「パッと咲いて散る桜っていいな」という理由で決め

た。“設計集団”の命名もユニークだ。プロジェクトごとにその道のエキスパートを集めて挑み、プロジェクトが終わったら解散する。ゆるい関係性で集団を組むのがいいとの持論からだ。開設当初からオフィスは複数社でシェアして来た。合理的思考だが、ゆったりとした雰囲気安井さんの周りには、建築家や技術者など、ものづくりが好きな人が自然に集まり集団化するのです。

■研究と実働とTIMBERIZE

早稲田大学に移った長谷見教授に誘われて同大学研究員となり、先生が退官した現在も大学での活動は続いている。2004年に博士（工学）を取ったのを境に、共同研究の相談が格段に増えた。「防火は専門家が少ないから」と謙遜するが、研究と実務を両立してきた結果皆が頼りにする存在になった。「木造の防耐火は、法律もややこしいからコンサルが必要なんですよ。理解してしまえば分かる分野です」と。コロナ禍前は、年間100回くらい講演していたといいます。

防耐火設計のサポートだけでなく、「谷中の町屋」など建築設計も行う安井さん。直近では2024年5月に滋賀県大津市につくった住宅がお披露目された。設計から現場で職人作業まで携わった。天然乾燥材で竹小舞下地、古畳を混ぜた土壁、焼杉板の外壁などなど。エコな昔からの素材に、現代の技術と性能を複合させる。外部に接する面にはストーンウールとJパネルで断熱は完璧にされている。宮内建築の関岡舞美さん達との集団がここにもあるのです。

また、「下馬の住宅」などで著名な、NPO法人team Timberizeと、設立当初からかかわりが深く、2000年に法改正によって建築の主役になろうとしている「木」を新しい素材として捉えて社会に提案することを目的に活動を続けている。専門家として安井さんはここでも軸になっている。

現在のオフィスは代々木だが、京都にも町屋の実家とは別にシェアオフィスを実働させている。また、セカンドハウスとして小淵沢に山小屋もあり、若い人たちに「火育をする」研修所として活用している。

技術開発と設計と研究とで多忙極まりない中、京都の優男とは違う、頼りたくなるシャープな安井昇スタイルはここにも現れているようなのです。